

「あなたが遺したいものは何ですか？」(要旨)

聖書箇所：マタイの福音書15章1-20節

【1】 手を洗わないで食べるパン

イエスの名声はエルサレムまで知れ渡りました。宗教指導者のパリサイ人や律法学者たちもイエスと弟子たちの動向を無視できなくなりました。ある時イエスの弟子たちが手を洗わずにパンを食べていることがわかりました。弟子たちの振る舞いは「長老たちの言い伝え」(マタイ 15:2) を破るものでしたので、パリサイ人たちは苦情を訴えました。何が問題だったのでしょうか。

律法は、死や病気を神から遠い汚れとして扱いました。その汚れは伝染すると理解されていたため洗わない手で食事をすれば、汚れが体内に入り、人を汚すことになるというのです。そのためユダヤ人の中でも特にパリサイ人や律法学者たちは汚れに接触することのないよう、細心の注意を払っていました(参考マコ 7:3-4)。

【2】 神の戒めを破る

当時のパリサイ人や律法学者たちは、もともと祭司たちが務めを果たすための「きよめの規定」を一般の人々にも拡大適用し、「長老たちの言い伝え」として教えていました(参照出エジプト 30:18-21)。本来、神の律法を守るために具体的にどうしたら良いのかを「長老たちの言い伝え」は教えていました。イエスは、彼らがその言い伝えを守ることに固執し神の戒めを蔑ろにしていると指摘されました。「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを破るのですか」(マタイ 15:3)

イエスは、彼らが十戒の第五の戒め「父と母を敬え」を無にしていると指摘しました。親に提供することが期待されているものでも、「『神へのささげ物(コルバン)になります』」と言えば扶養の義務を免れ得るなどと言い、「ささげ物の規定」を抜け道として使っていると。表面的には敬虔に振る舞いながら、その心は神から遠く離れていることを指摘されました。パリサイ人たちや律法

学者たちは神の戒めを破ることのないよう、律法を囲むようにして様々な規則を設けました。けれどもそもそも「神の戒め」を理解していないため、間違った方向に人々を誘導しているとイエスは言われたのです(マタイ 15:13-14)。

【3】 人を汚すもの

当時ユダヤ人たちは、汚れへの接触と汚れた食物の摂取を避けていました(参照使徒 10:1-33)。イエスは、人を汚すものは「口から入る物」ではなく「口から出るもの」だと断言しました。イエスの弟子を含めたユダヤ人にとってそれは革新的な内容でした。戸惑う弟子の思いを代弁し、ペテロはイエスに尋ねます。「私たちに、そのたとえを説明してください。」(マタイ 15:15)

イエスは丁寧に返答されました。「汚れたもの」が口から入っても腹に入り排泄されて外に出される。したがって「汚れ」は体に残らない。洗わない手で食べても、それがその人を汚すことにならない。一方、本当の汚れは人間の内側からにじみ出てくるものであり、「心から出てくる」(マタイ 15:18-19)ものが人を汚すのだと。

伝統と慣習を守ることで満足していたパリサイ人たち。事細かなルールを設け、それらを守ることで頭がいっぱいになり、いつの間にか神の御心を求めて生きることから離れてしまう。こうしたことはパリサイ人たちだけの課題なのでしょうか。

▷今年度は「蒔く者と刈る者ともに喜ぼう」を目指して歩んでいます。あなたが次代を担う兄弟に遺したいものは何ですか？

「こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。」(Iコリント 13:13)

